難関私立大対策講座―現代文―

はじめに

伝統と歴史を誇る、明治大・青山学院大・立教大・法政大・中央大・関西学院大・関西大・同志社大・立命館大など関東と関西の難関私立大対策講座です。それらの大学の過去問題から代表的なものをピックアップ・編集してテキストとしています。ただし、やみくもな過去問集ではなく、近年の出題傾向を反映するとともに現代文理解と解法を語る上で意義のある文章をそろえました。入試素材としてアタックする価値があるとともに読書上の価値も高いものばかりです。

なお、当日の講義を最大限意義のあるものとするために事前に予習して、つまり解答をつくってから授業に参加してください。では、当日を楽しみにしております。

予習について

全講義予習しましょう。問題にアタックして解答をつくってから授業に参加してください。

復習について

間違えた部分について、同種の問題が本番でも出題されるというつもりで、見直してください。その後、スタディ・サプリのアーカイブの問題などにどんどんアタックしてください。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルを見る**　↓　**テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と○○」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくにセンター試験現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。ただし**選択肢まで読んではダメ**。たとえば五択なら四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

（**3　論説では、本文最後の数行を先に**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。）

1と2で充分な見当がつけば、4に移行してOK

4　**本文を冒頭から読む**

プランA……設問の傍線部や空欄にあたるたびに、それらを含む段落を読んでから解答する。選択肢などは、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

プランB……プランAだとぶつ切りで文章理解のリズムが壊れるとお感じの人は、全文通しで読んでから各問に取り掛かってもよいです。

記述式問題解答へのガイドライン

1　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり0点）

2　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ1点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、1点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a　［　｜人｜間｜は｜…］→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b　［…｜…｜…｜こ｜と］→　**※句点なし！**（1点減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c　［…｜…｜…｜こ｜と。］→　**※句読点は一文字分！**（1点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○ 具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○ 対比の表現（AではなくBである）！
○ 繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇐ 心身
語句 ← 心身の一体性

（例）心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

⇒ 一文・文

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 対比混乱の誤り ………本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**といってもいい。

2 同一性分断の誤り ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 正しい対比喪失の誤り ……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 不当な全称判断 ………本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 不当な限定判断 ………本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**(わいしょうか)があります。例えば本文では「人間関係全般」について書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 不当な価値判断 （不当な当為(とうい)判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 部分的指摘の誤り

……本文中では、**「AともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 記述に反する誤り

……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 記述なしの誤り

……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 文脈喪失の誤り

……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 物理的スリカエの誤り

……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 比喩を文字通りに解釈した誤り

……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13 具体例は、一段、落ちる

……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

14 比喩による説明は、一段、落ちる

……たとえで説明している選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっと明示的な語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

目次

第一講　〈論説〉漫画文化論・戦後史論……鶴見　俊輔　p. 8
第二講　〈論説〉現代社会論・メディア論・記号論……米澤　泉　p. 18
第三講　〈論説〉科学論・精神医学論……中井　久夫　p. 26
第四講　〈論説〉文芸論・詩画集論……大岡　信　p. 36

第一講 〈論説〉 漫画文化論・戦後史論

次の文章を読んで後の問いに答えよ。

いじわるばあさんの登場は、おそらくは作者の生涯における一つの(1)危機に根ざしている。
(注1)長谷川町子の家庭はキリスト教に早くから入っていたが、若いころの彼女は、あまり熱心な信者ではなかった。牧師がたずねてくると、相手をするのは、もっぱら母親であり、町子は、深刻な話題をさけて、便所にかくれたりした。

苦しいことがあれば、お風呂に入るというのが、若いころの特効薬だったようだ。しかし二十数年も、助手にたすけられることもなく毎日、漫画をかきつづけるというのは、たいへんな仕事だ。お風呂などではなかなか気分の転換がはかれず、途中で、スランプにおちいって、他の人のくらしかたがうらやましく思える時もあったらしい。四十の坂にかかり、作品の上では二十代の主婦に感情移入して毎日活躍していても、そこにもりきれない感情があって、作品がそのまま自分を解放するという幸福な状態ではなくなった。一九六〇年代の高度成長の時代に育った若い日本人の風俗からはじきだされた中年の女性として孤独感をあじわうようになった。

自分にもっとも忠実な弟子である愚直なペテロにたいしてさえ、あすの朝にわとりが鳴くまえに、おまえはわたしを三度うらぎるぞと言ったイエス・キリストの皮肉なまなざしを、彼女は、戦後の日本にたいしてむけるようになった。『いじわるばあさん』にはそういう視点がある。そして、みずからの独身中年女性としてのおきざりにされたいやな感じを、ひととびに中年から老年にむかってさらにはげしく変身させることをとおして（もっとも「エプロンおばさん」という中年女性を主人公にした作品もあるが）、もっとにつめてゆき、自分をおきざりにした社会にたいする攻撃に転じた。

[　]、この時になっても、作者は、サザエさんをすてて、いじわるばあさんにおもむいたのではない。あくまでも、サザエさんといじわるばあさんの二人三脚で、戦後の日本社会に対している。いわば、ここには、戦後の民主主義についての当事者としての(2)渦中の論理と、列外におかれたものとしての(3)傍観の論理との合作がある。

もちろん、サザエさんといじわるばあさんの両人をくみあわせても、それでもとらえられない戦後日本の問題はたくさんある。

たとえば、サザエさんのおとうさんは、おそらくは、十五年間の戦争に何かの仕方でくわわっていたのだろうが、このおとうさんはみずからの戦争体験をかたることがない。サザエさんの夫となった人も、おそらくは兵士として動員されたことのある人なのだろうが、その立場から何かをのべたということがない。つまり、この「サザエさん」(二十代)――「エプロンおばさん」(五十代)――「いじわるばあさん」(七十代)のすべての主要作品を通じて、作者は、女性の側からのみ、日本の社会の問題をとらえている。

(4)こういう見方は、国家の運営をまかされたと感じている官僚の考え方とはずいぶんちがうものだし、その官僚を抽象的原則によって批判する学生の考え方ともずいぶんちがう。

ひとりものの学生の時だけは急進的な立場をとって権力を批判し、家庭に入ると急に老いこんで権力に同調的になるという一般的傾向とは、かなりちがうコースを、「サザエさん」は示している。家庭内での助けあいと対等の倫理をひろく社会に適用することを求めるという立場について、「サザエさん」は戦後をつらぬいている。大学でも、総合雑誌でも、戦後民主主義は評判がわるいが、「サザエさん」をとりあげて読みはじめると、戦後民主主義が色あせずにここにあることを私は感じる。政界や論壇の戦後民主主義の代表者の議論のように色あせて見えないのは、それが生活のスタイルをとおしてうったえる戦後民主主義の理想であるからだ。

「サザエさん」の家庭が、今の日本で大勢をしめている核家族だけでとおすという理想につかず、三世代一緒にくらすという姿勢をつらぬいているところに、この作品が、おもに家庭内の話題をとりあげながらも、社会批判としての側面をうしなわない理由があると思える。

サザエさんの家庭では、父親はいつも、彼なりによくやっているとは認められているものの、(5)たいして偉い人とは思われていない。彼が、サザエさんよりも背丈が小さいのも、その象徴としての意味をもっている。戦前の日本は、天皇が日本人全体の父親であるように、家庭では父親がたてられているというふうに教えられていた。このようにして国家は一つ一つの家庭ぐるみに日本全体をとらえるしくみになっていた。しかしサザエさんの家庭のように、父親が誠実だが無力な小さい人となり、一家のむすびつきはむしろ母親と長女をとおしてなりたっていることが家庭全体に公認されている時、そこでそだった感覚を社会全体にたいして応用すると、日本の国家は、どうなるのか。イソノ家としては墓まいりには行くものの、自分の家が未来にたいし

てもつ万世一系性などを信じてはいない。自分の家にたいするこの感じ方が、国家にむけられるとどうなるのだろうか。「サザエさん」の思想に共感をもつ人びとにとっては、政府の命令一つで私生活を犠牲にして何でもするという気にならないことはたしかだ。

「サザエさん」は、日本の国家の統制力がゆるんだ敗戦直後の時代にうまれた。この時代には、家庭は、ただあたえられたものをえらんで買ってきてたべるということでは経営できない。家庭菜園で食糧をつくり、それでも足りないから、法律をやぶって足りない米のおぎないをつけるための闇買いまでしなければならない。町でうっていないさまざまのものを、(注2)タドンから衣類にいたるまで自分でつくらねばならない。家庭は消費の場であるだけでなく、生産の場でもあった。その敗戦直後の気風は、「サザエさん」の作者の家庭の中でも二十数年のあいだにうすらいでゆくが、しかし作者たち三人の姉妹があいよって「姉妹社」という出版社をつくって流通機構の管理をつづける中で、長谷川家には、消費本位の家庭にもどることのない戦後の多面的な家庭の気風が今日もなおのこっている。このことがおそらくは、「サザエさん」の中に、高度成長時代の日本の家庭から見れば一時代おくれた家風をのこしている原因であり、それは時代おくれであるとともに、(6)現代の実際の家庭にたいして、戦後の理想を説くという理想主義的な役割をあたえている。

（鶴見俊輔『漫画の戦後思想』文藝春秋による）

（注）1　長谷川町子――日本初の女性プロ漫画家（一九二〇〜一九九二）。
　　2　タドン――木炭や竹炭の粉末を団子状にして乾燥させた燃料。炭団。

問1　傍線部（1）について。ここで書かれている作者の「危機」とは何に根ざしていると考えられるか。次の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　キリスト教の熱心な信者ではなかったこと。
2　二十数年も漫画をかきつづけることはたいへんな仕事であり身体的にも精神的にも疲弊していたこと。
3　漫画家として才能の限界を感じるようになったこと。
4　四十の坂にかかり、いつまでも二十代の主婦（サザエさん）に感情移入していられなくなったこと。
5　若い人たちの感覚とのギャップからつよい疎外感を覚えるようになっていたこと。

問2　空欄□にあてはまる接続詞はどれか。次の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　そのために　　2　なぜなら　　3　もちろん　　4　ところで　　5　しかし

問3　傍線部（2）・（3）について。戦後の民主主義についての「渦中の論理」と「傍観の論理」を象徴するのはそれぞれ誰になるか。次の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　「渦中の論理」・・サザエさん、エプロンおばさん、いじわるばあさん
「傍観の論理」・・作者（長谷川町子）
2　「渦中の論理」・・エプロンおばさん
「傍観の論理」・・いじわるばあさん
3　「渦中の論理」・・いじわるばあさん
「傍観の論理」・・サザエさん
4　「渦中の論理」・・作者（長谷川町子）
「傍観の論理」・・サザエさん、いじわるばあさん

5　「渦中の論理」・・サザエさん
「傍観の論理」・・いじわるばあさん

問4　傍線部（4）について。「こういう見方」として合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
イ　「サザエさん」や「いじわるばあさん」にみられる日常的な生活観や社会に対する考え方。
ロ　みずからの戦争体験は家庭内で日常的に語りつがなければならないという考え方。
ハ　官僚は国家の運営に責任をもつべきだしそのことを批判するべきではないという考え方。
ニ　家庭に入れば現実的な考え方となり、権力に同調することはしかたがないという考え方。
ホ　日常生活において家族が協力するといった価値観は社会に対しても適用されるという考え方。

問5　傍線部（5）について。サザエさんの家庭では、父親は「たいして偉い人とは思われていない」とあるが、その説明として最も適当なもの一つを、次の中から選び、番号で答えよ。
1　戦前の日本社会において、家庭では父親がたてられると教えられてきたが、戦後はその価値観が変わった。
2　サザエさん一家の結びつきはむしろ母親と長女の結びつきで成り立っており、父親の存在が小さかった。
3　サザエさん一家の結びつき方は、戦前の家父長制とは相いれず、戦後民主主義に通じるものがある。
4　サザエさん一家では女性が活動的なので、父親が家庭内で役割を果たす機会が少なかった。
5　戦後の日本社会において、父親が偉いと思われるためには社会的地位の上昇や経済的成功が必要である。

問6　傍線部（6）について。「現代の実際の家庭にたいして、戦後の理想を説く」とあるが、ここでの「理想」として合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
イ　敗戦直後のように家庭菜園で食糧をつくるなど、食糧自給できる家庭。
ロ　食糧や日用品を単に消費するだけでなく、さまざまなものを生産しながら生活する家庭。

ハ　父親や夫がサラリーマンとしてはたらき、母親など女性は専業主婦として生活する家庭。

ニ　敗戦直後の物資不足から解放されて、豊かな消費生活を享受できる家庭。

ホ　消費本位でない多面的な気風がのこる家庭。

第一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　鶴見俊輔＝つるみ　しゅんすけ（一九二二〜二〇一五）ハーヴァード大学卒業。日米の戦争に際し「負けるときには負ける側にいたい」と一九四二年に帰国。高名な哲学者にして数々の漫画研究でも知られる

語句

牧師＝ぼくし→プロテスタント系の教会や教区で信者を指導する人。カトリック系なら「司祭」「神父」

スラムプ→一時的に調子がくずれていつもの能力を発揮できない状態。スランプ

風俗＝ふうぞく→日常的な暮らしや文化、およびそこで作られる心情

愚直＝ぐちょく→臨機応変とはいえないが真面目にコツコツ進める人柄。「バカ正直」という意味もある

皮肉＝ひにく→表面的事実とはことなる深層的事実を指摘すること。相手を遠回しに批判すること。アイロニー（イロニー）

おもむく＝赴く→向かう。進む

渦中＝かちゅう→大きな出来事の中にいるということ。当事者である状態

傍観＝ぼうかん→第三者の視点。他人事として見る見方

抽象＝ちゅうしょう→具体的なものから重要なものを抽出したもの。悪く言うと、具体性を欠いた漠然としたもの

急進＝きゅうしん→理想を追求して変革を急ぐこと。対義語…「保守」「守旧」「漸進（ぜんしん）（少しずつ進むこと）」

倫理＝りんり→道徳。人としてのあるべき道。エシックス

論壇＝ろんだん→学者や評論家の社会。言論界

誠実＝せいじつ→ウソやごまかしがなく良心にまっすぐ従うこと

万世一系＝ばんせいいっけい→永遠に家族（血筋）の系統が一本であること

統制＝とうせい→コントロールすること

気風＝きふう→共通してもっている気質やプライド

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）登場人物に感情イ入する　①異　②移　③偉　④依　⑤委

（イ）連載中のマン画に熱中する　①満　②漫　③慢　④萬　⑤万

（ウ）師匠に対してチュウ実である　①注　②註　③忠　④柱　⑤仲

（エ）グ直なまでに努力を重ねる　①具　②倶　③偶　④愚　⑤遇

（オ）人生のコ独を引き受ける　①孤　②狐　③個　④児　⑤弧

（カ）趣味の時間をギ牲にする　①戯　②義　③儀　④偽　⑤犠

（キ）カ中の人物が記者会見する　①過　②火　③禍　④渦　⑤課

（ク）本の流通機コウを調べる　①講　②項　③構　④抗　⑤稿

（ケ）官リョウの答弁に疑義が出る　①僚　②寮　③燎　④療　⑤領

（コ）急シン的な議論に参加する　①芯　②新　③進　④信　⑤真

第二講〈論説〉現代社会論・メディア論・記号論

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

美白、顔黒、茶髪、目力。近頃、化粧にまつわる新語や流行語が目立っている。それだけ人々の関心が化粧に向いているということなのだろうが、むろんすべての人々が化粧を歓迎しているわけではない。とりわけ電車内で化粧をする若者には、「良識ある大人」からの冷ややかな視線が注がれる。

[1]若者はなぜ、人前で堂々と化粧ができるようになったのか。彼らがこの「不可解」で「恥知らず」な行為を行えるようになるには、まず化粧品そのものが大幅に変化せねばならなかった。九〇年代に、化粧品は単なる化粧の道具というよりも、明確なメッセージをもつモードとなったのである。

モードとは何か。*高橋源一郎によれば、モードとは「半」小説である。すなわち、主人公の顔のない小説、「読者参加」型の小説であって、読者（受け手）が「読む」ことによって初めて完成される作品である。化粧品がモードになったということは、[2]化粧品もまた読者が「読む」ことによって完成される作品になったことを意味する。 A 、モードになった化粧品を人々はどのように「読んで」いったのだろう。

スーパーモデル・ブームはモードという「半」小説を、規制緩和は化粧品の「大型書店」を消費者にもたらした。メーキャップ・アーティストによってプロデュースされた化粧品とそれらを自由に試して買える空間が与えられたのである。もはやデパートや町の化粧品店で、美容部員から薦められた化粧品一式を買わされることもない。心ゆくまで「立ち読み」してから、好きな化粧品を組み合わせて買えるのだ。

 B 、ひとりの受け手としてモードを「読み」、積極的に関わっていくのは容易（たやす）いことではない。衣服のように、どのブランドの、どのアイテムを、どのように組み合わせるのか、という「着こなし」が至上命題となった。ファッション誌には化粧品の「着こなし」方が溢（あふ）れ、化粧情報専門の月刊誌も数多く創刊された。「読むコスメ」などというキャッチコピーで登場した各誌はいわば化粧品の「読書案内」である。

お洒落(しゃれ)な人のセンスある着こなし。ファッション誌では使い古されたフレーズもことが化粧となれば新鮮に映った。そのなかで「着こなし」の指南役として重宝されたのが、メーキャップ・アーティストや美容ジャーナリストだった。本来は裏方であった彼らの活躍により、化粧品を組み合わせ、顔に載せるという化粧行為は、化粧品の「読み」として人々のパブリックな場面に入り込んでいったのである。

化粧品の「読み」には素人も積極的だった。コスメフリークと呼ばれるモードの積極的な読み手もメディアに顔を出し、自らの選んだ化粧品や化粧法を公開し始めたのだ。誌上では選んだ化粧品を手に微笑む読者の記事が定番となり、彼らはなぜこの化粧品を選んだのかを熱っぽく語っている。「何も特別なことはしていない」と明言することが美徳であり、化粧が身だしなみや欠点を隠すものと考えられていた時代は過去のものとなった。

今や化粧は「読み」の行為なのである。化粧品を「読み」こなしていくこと、化粧品を「着こなせる」ことが称賛に値するのだ。だが化粧品を「読み」、「着こなす」ことを通して、彼らは何を求めているのだろうか。「きれいになりたい。」「センスがあると思われたい。」雑誌のタイトルになるほど常套句と化した言葉の裏にはいったい何があるのか。

メディアで「化粧センス」があり、「きれい」の第一人者として評価されている女優の山咲千里は、自らの化粧を「フェイス・コミュニケーション」であると言う。それは山咲が常に見せる自分であろうとし、化粧を主体的な、他者に積極的に働きかける行為として捉えているからだ。おそらく、ここでいう「化粧センス」とは、自分で自分を思い通りに見せられるということなのである。[3]今日はガングロでチャパツな私。明日はビハクして、メヂカラのある私というように。そして「きれい」とは身体の成形を通して、自己を成形できる者に対する賛辞なのである。［ C ］、化粧行為の過程を見せることは、恥でも何でもなく、単に自己を成形する過程を見せることであって、「化粧センス」の誇示にすぎないのだ。

［ D ］、「化粧センス」を誇示しあうのに顔そのものを見せる必要はないかも知れず、現にインターネット上ではコスメフリーク同士が顔を見せずに化粧を語りあうという[4]自己目的的な化粧行為を行っている。ネットで「おすすめコスメ」を書き込むコスメフリーク。フリークが選び抜いた化粧品は、彼らが化粧により完成させた顔よりも饒舌(じょうぜつ)に、彼ら自身を語るかもしれないのだ。

そういうわけで、電車の中で読書するように化粧する若者を一概に咎(とが)めることはできない。少なくともどちらも［ X ］

から。

（米澤泉『饒舌な化粧』「言語」11月号、第30巻第12号、大修館書店より）

（注）

＊高橋源一郎――小説家・評論家。一九九二年に刊行された『文学じゃないかもしれない症候群』で、作者が主人公の顔を書き入れる「ふつうの小説」に対し、「モード」は読者が自分でその主人公の顔を書き入れることによって完成する「半」小説だと論じている。

問1　傍線部1「若者はなぜ、人前で堂々と化粧ができるようになったのか」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　化粧が主体的でかつ他者に働きかける積極的な行為として解釈されるようになったことで、化粧行為と電車内の乗客との間に、作品と読者という関係が生じているから。

イ　自分が流行の最先端を行き、しかもその流れを正しく解釈していることを示す有効な手段の一つとして、化粧という行為が世間で一般的に認知されるようになったから。

ウ　多くのメーキャップ・アーティストや美容ジャーナリストが活躍したことで、素人もその「読み」の行為に積極的に加わることが可能となる環境が整備されたから。

エ　化粧をした顔が他者に見られることで完成する作品としての地位を築いたことで、化粧という行為自体も他者に見られることを前提としたものへと変化して行ったから。

オ　若者の間で化粧行為が自己表現の一つとして認められるようになったことで、欠点を隠すための恥ずべき行為としての認識が薄れたから。

問２　傍線部２「化粧品もまた読者が「読む」ことによって完成される作品になった」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　ファッションや化粧法だけでなく、化粧品までもが流行の一部として組み込まれてしまったため、その流行を積極的に「読む」ことが求められるようになったということ。

イ　流行の化粧品を身につけたモデルとその化粧品を買う側との間に、小説家と読者の関係に極めて類似した関係が生じたということ。

ウ　化粧品と化粧法が多様化したことで、小説の読解と同じように、化粧品の使用法にも個々人の解釈の違いが生じ、人々がその違いを積極的に楽しむようになったということ。

エ　自分を小説の主人公に重ねて楽しむように、様々な化粧品もその効果・効能を理解し、それらを自分に当てはめて楽しむものになったということ。

オ　明確なメッセージを持つ化粧品を使用した化粧は、周囲の人々がそれに込められた意図を正しく読み取ってくれて初めて、作品としての意味を持つようになったということ。

問３　空欄［Ａ］～［Ｄ］に入る接続表現として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。ただし同じ選択肢を二度用いてはならない。

ア　だが　　　イ　いやしくも　　　ウ　そのうえ　　　エ　だから

オ　なかんずく　　　カ　だとすれば　　　キ　では　　　ク　にもかかわらず

問４　傍線部３「今日はガングロでチャパツな私。明日はビハクして、メヂカラのある私」にはどのような心情が表れているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　流行する様々な化粧を使い分けることで、異性に積極的に働きかけようとする気持ち。

イ　本来の姿ではないことは認めつつも、自分を可愛らしく見せようとする健気な気持ち。

ウ　自らの化粧センスを披露しつつ、自分のイメージを様々に演出することを楽しむ気持ち。
エ　普段は見せない自分の内面を一時的にさらけ出すことで得られる解放感を味わう気持ち。
オ　いろいろな化粧を試し、自分の個性に合った化粧法を模索しようとする積極的な気持ち。

問5　傍線部4「自己目的的な化粧行為」の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　実際に化粧品を使用して自分を「きれい」に見せるというかつての化粧の目的が忘れられ、モードを「読む」ことが主目的にすり替わっているが、それも化粧行為の一種として認められるということ。
イ　豊富な商品知識や美的センスを語るだけでも、自分を「きれい」に見せる効果を生むため、実際に化粧をして見せるのではなく、語ること自体が目的になってしまっているということ。
ウ　化粧本来の目的を見失った一部のフリーク達が、モードの「読み」に関して情報交換をするだけで満足してしまい、実際に自分が化粧をすることは二の次になっているということ。
エ　モードを「読む」ことだけに没頭し、かつての化粧の目的を忘れているため、ネット上でいくら化粧品について議論しようとも、それは単なる自己満足の化粧行為にしかならないということ。
オ　情報交換をするという本来の目的を忘れ、自己の化粧センスを披露することが目的になっているが、自分を実像以上に良く見せるという点ではそれも化粧行為の一種として認めざるを得ないということ。

問6　空欄 X に入る表現を十字以内で記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

第二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　米澤泉＝よねざわ　いずみ（一九七〇〜）京都府生まれ。同志社大学文学部卒、大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程単位習得退学。甲南女子大学准教授。ファッション文化論、化粧文化論などが研究テーマ。著書『電車の中で化粧する女たち』『「女子」の誕生』『女子のチカラ』など

語句

至上＝しじょう→絶対的な第一の価値
命題＝めいだい→果たすべき課題、やりとげるべき目標。学術的には「AはBである」という形で明言されたもの
指南＝しなん→理論や知識に基づいて基礎から指導、手ほどきすること
フリーク→異常なほどのめりこんでいるマニア
定番＝ていばん→時流に左右されない基本形態のもの
美徳＝びとく→ほめられるべき良い点　対義語…悪徳
常套句＝じょうとうく→決まり文句
賛辞＝さんじ→ほめ言葉
誇示＝こじ→アピールすること
饒舌＝じょうぜつ→話題が尽きず、おしゃべりなこと　cf. 雄弁（ゆうべん）→説得力あるしゃべり
咎める＝とがめる→あやまちや欠点を指摘すること

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

(ア) 不カ解な事実に直面する　①過　②架　③可　④渦　⑤加

(イ) お洒落がシ上命題になる　①至　②史　③市　④試　⑤私

(ウ) 電車で化粧をカン迎しない　①歓　②感　③観　④敢　⑤勧

(エ) 従来の規制をカン和する　①監　②環　③管　④緩　⑤寒

(オ) 美ヨウ部員の説明を受ける　①容　②用　③洋　④庸　⑤養

(カ) 新しい情報誌を創カンする　①漢　②刊　③監　④関　⑤還

(キ) 将棋の基本を指ナンする　①何　②難　③軟　④南　⑤納

(ク) 秋服の定バン商品を求める　①盤　②版　③番　④蛮　⑤板

(ケ) 見事な作品に賛ジが集まる　①字　②事　③辞　④慈　⑤児

(コ) お決まりのジョウ套句を使う　①上　②城　③醸　④場　⑤常

第三講〈論説〉科学論・精神医学論

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

もし、人体研究を医学というならば、それは科学である。すなわち、人体にかんする一種の生物学である。しかし、それは「疾患に関係しているところを特に詳しく調べる人体生物学である」という付記を加えても、医学であろうか。それは「医学的生物学」medical biology である。

では、何が足りないのであろうか。犯罪学者でもあるエランベルジェは、犯罪学と医学が科学でない理由として、疾患の研究、犯罪の研究からは「疾患は治療するべきであり、犯罪は防止するべきであるということが理論的に出てこない」ことを強調している。すなわち、彼によれば、犯罪学と医学は「科学プラス倫理」であって、これを総合科学と呼ぼうと提唱している――「科学」という言葉を使っているではないかといわれそうだが、欧米語のサイエンスはラテン語の scientia に発して「知」ということである。「総合知」と訳したほうがよかったであろう。ちなみに「科学」は日本最初の「哲学者」西周（にしあまね）の造語で「科」は「分科」ではなく「法則」の意味である。「法則の定立を目指す学」ということだ。

(1)<u>この指摘</u>は確かに一つのポイントである。では、倫理と科学といずれが優先するであろうか。科学的であっても反倫理的であれば医学ではない。逆に、治療を目的とするものであれば、現に用いられているように経験論的医学たとえば中医学であってもよい。難治褥瘡（じょくそう）や歯周病の治療にはしばしば健康食品プロポリスが有効である。こういう裾野（すその）を含めて、医学とはまず倫理的なものである。

しかし、それでは不十分であると私は考える。少なくとも、もう一点で、医学は科学と相違する。それは、囲碁（いご）や将棋が数学化できるかどうかという問題と本質的に同じである。囲碁や将棋は数学化できない。それは、科学とちがって徹底的に対象化することのできない「相手」があるからである。「対象」でなく「相手」である。わかりやすいために、殺伐な話だが戦争術を考えてみるとよい。実験的法則科学はいつも成立しなければならないが、「必ず勝てる」軍事学はない。もしできれば、人間に理性がある限り、戦争は起こらない。それでも起これば、それは心理学か犯罪学という「総合知」の対象である。経済学でもよい。

インフレやデフレなどの経済学的不都合を絶対に克服する学ではなく、その確実な予測の学でさえない。これらが向かい合うものは「相手」である。科学は向かい合うものを徹底的に対象化する。そしてほとんどつねに成り立つ「再現性のある」定式の集合である。対象化と再現性は表裏一体である。すなわち、「相手」が予想外の動きをしては困るのである。ところが、囲碁や将棋や戦争術は相手の予想外に出ようとする主体間の術である。なるほど、経済学は、常に最大利益を得ようとして行動する「経済人（ホモ・エコノミクス）」というものを仮定しているが、これは人工的な対象化であって、経済学が経済の実態の予測を困難にしている一因である。それは、経済学の対象すなわち経済行動を行う人間の持つ、利益追求の欲望以外の心理学的要素の大きさを重々自覚しながら、これを数理化できないために排除しているからである。つまり、(2)科学的であろうとする努力が経済学をかえって現実から遠ざけてきた。現在、むき出しの「市場原理」が復権をとげている。「市場原理」ならばローマ時代、いや太古からあった。

(3)医学も何かを相手に将棋を指している。その相手は何であろうか。ある人は「病い」といい、ある人はそれは抽象概念の実体化であって相手は「病める人間」であるという。「生物学的・心理学的・社会学的人間」だともいう。「人間の集団」だと疫学はいうであろう。「実存的なもの」も排除できない。実に、医学は「相手は何か」と問いつめられると困るものではないだろうか。医学には他の「学問・技術」にはない、混沌・未分化的なものがある。いずれにせよ相手は複雑な系であり、たえず予想を裏切るように動いている。

その相手が将棋と違うのは、治療者と対等で同質な［（4）］ではない点である。しかし、一方だけを［（4）］として、相手を徹底的に対象化することができない点は同じである。相手を固定すなわち対象化しようとしては裏切られるような力動的関係にあるというべきか。それは戦争術に似ている。この力動的関係の混沌・未分化性は、その「未発達性」のためではないと私は考える。すなわち、人間が人間を相手としているからである。医学においては相手を生かすために、戦争術においては相手の立場を失わせるために――。メスをふるう外科医は自身も創傷や腫瘍を持つ可能性を抱えている。痛みうる人間が医学、精神医学をやり、犯罪を犯しうる人間が犯罪学をやる。こういう対象化しえないものを相手とする学があることは確かである。それは近似的な、おおむねこうすればおおむね成功するであろうという「定石」から始まるが、意外にも「捨て石」が死活問題を解決したりして、有限時間内には完全に言語あるいは数式化できないものである。つまり、時には何が正しいかを言えなくとも、ある時

間の範囲に何ごとかをしなければならない場合がある。すなわち、直観や熟練（スキル）を必要とする。最後には言語化が不可能に近いものをも含む。医学はなぜ独学で学べないかをよく考えてみよう。

科学は、この不確定部分を最小にしようとする。それが医学の科学的部分である。最小化しようとするのは、しかし、科学の専売ではない。経験、熟練、直観も、不確定性を最小にしようとする。飛行機の操縦術や航海術と同じである。

では、ありとあらゆる場合を予想して方策を立てれば、医学はついに科学となるであろうか。すでにチェスはコンピュータがしばしば名人を負かしているではないか。この場合、チェスをするコンピュータは科学によって作られたものだが、科学を離れて、「相手」のある領域に入り込んでいるのである。実際、負けたり勝ったりするではないか。

いや、コンピュータをもっと進歩させれば、チェスで必ず勝つであろう、いや今は勝てない碁や将棋でも必ず勝てるであろうという議論があるかもしれない。これは科学の勝利である――と。それは科学の勝利ではあるが、科学になったのではない。そういうコンピュータができて、それが普及すれば、そのゲームは魅力を失い、やがて消滅するであろう。つまり、問題そのものがなくなってしまう。その前にコンピュータ同士を闘わせるかもしれないが、これはコンピュータ設計者同士の闘いであり、ローマ人が猛獣あるいは剣士を闘わせて見物していたのと少し違う。

将棋や碁と違って、医学でも戦争術でも、完全なデータを得ることはできない。一般に、データを得るためには対象を多少なりとも破壊しなければならないからである。また、データは必ず時遅れである。不完全なデータから［（5）］して事態を先取りしなければならない。そして、医学という実践は、相当に安定した部分をも含むけれども、それでも特異体質などに裏切られることになる。状況に応じて変化するスキルをも含む。目標、いや目標を越えた大局観に関するスキルも必要である。先端的な部分では、職人的なスキルと戦略家のような決断の比重が大きくなる。たとえば、微細な血管が入り組んでいる部分の手術である。ここでは技術（テクニック）と戦術（タクティックス）と戦略（ストラテジー）のヒエラルキーが確実に術者の中で動いていることが必要である。

このようなタイプの「相手」と向き合うものを科学や人間以外のものを「相手」とする術と区別して何と呼ぶのがよいであろうか。私には成案がないが、仮に「実践知」としておこう。それは生の現実と相渉（わた）るものである。

その有力な方法であるスキルについて一言しておこう。スキルは、言語によって伝達できない部分を含む。理論的には言語化できるかもしれないが、具体的に異星人に鉛筆の削り方を教える場合を考えてみればよい。鉛筆をみたことのない者に対する「鉛

筆の削り方マニュアル」を作成すれば何ページになるであろうか。どの筋肉の次にどの筋肉をどれだけどの方向に動かすとかを書いてゆくことを考えてみよう。しかし、眼の前で削ってみせればあっという間に伝達できる。これを行動による伝達としよう。最近の医学教育には、鉛筆を削るマニュアルを、鉛筆を削ってみせることよりも何か正しいこと、新しいことのように考えるきらいがある。その傾向は現場を知らずに育った医学教育者に特にみられる。スキルにはそういう（6）的にしか伝達しえないものがある。

（中井久夫『徴候・記憶・外傷』による）

（注）エランベルジェ――二十世紀の精神科医、犯罪学者、歴史学者。
中医学――漢方や鍼灸（しんきゅう）などの中国の伝統医学。

問1　傍線（1）「この指摘」とはどのような指摘か。もっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えよ。

A　犯罪学や医学の研究は科学とは異なり、必ずしも犯罪の防止や病の治療を目的とするとは限らないという、エランベルジェの指摘。
B　エランベルジェが犯罪学や医学に与えた呼称である「総合科学」は、むしろ「総合知」と訳した方が適切であっただろうという指摘。
C　エランベルジェがそうであるように、犯罪学者や医者は、単に優れた科学者であるだけでなく、高いモラルを兼ね備えていなければならないという指摘。
D　科学とはもともと「法則の定立を目指す学」であるから、法則に還元できない複雑な犯罪や疾患の研究は科学とは異なるという指摘。
E　犯罪学や医学は、科学的研究の側面を持ちながらも、社会道徳や人道に適（かな）った目的のためになされなければならない点で、科学とは異なるという指摘。

問2　傍線（2）「科学的であろうとする努力が経済学をかえって現実から遠ざけてきた」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えよ。

A　経済学は、経済活動を行う人間の複雑な心理学的要素まで科学的に解明しようと努力したが、現実には到底数理化することはできないので、かえって不完全な科学にとどまる結果となった。

B　経済学は、予想外の行動をとる人間の経済行動を数理化することばかりにとらわれて、その一方で、現実に起こっているインフレやデフレなどの経済的不都合に対処することを怠るようになった。

C　経済学は、インフレやデフレなどの経済的不都合を科学的に解明しようと試みたが、その際、現実には、利益追求の欲望以外の心理学的要素がいかに経済行動に影響しているかを過小評価した。

D　経済学は、数理化できないものはあえて対象としなかったために、利益追求の欲求だけに従って行動する「経済人」という現実には存在しないような架空の対象を相手とする事態となった。

E　経済学は、人間は利益追求の欲求に従って行動するという理論に基づいているので、その結果、太古から存在するとはいえ現実には機能しない「市場原理」を復活させた。

問3　傍線（3）「医学も何かを相手に将棋を指している」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えよ。

A　医学においても医者や医学研究者は、「病い」という抽象的な相手を打ち負かそうとしている。

B　医学においても医者や医学研究者は、同じ人間として患者と対等に向き合っている。

C　医学においても医者や医学研究者は、科学的に対象化しきれないものを相手にしている。

D　医学においても医者や医学研究者は、予想を裏切るようなものを排除しようとしている。

E　医学においても医者や医学研究者は、現在予測できないものも予測しようと試みている。

問４　空欄（４）（５）（６）に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれ次の中から選び、符号で答えよ。

（４）　A　主体　　B　客体　　C　実体　　D　人間　　E　対象

（５）　A　飛躍　　B　熟考　　C　推論　　D　即断　　E　復元

（６）　A　感覚　　B　実践　　C　直観　　D　身体　　E　視覚

問５　次のア～エのうち、筆者の考えと合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えよ。

ア　その研究がどんなに優れたものであり科学の発展に貢献するものであっても、結果として治療に役立たなければ医学とはいえない。

イ　医学は人間を相手にしているがゆえに、患者の特異体質のような予想外のケースが生じることは避けられない。しかし、医学はこうした特殊なケースに関してもできるだけデータを集積し、可能な限り法則化を試みている。

ウ　囲碁や将棋は、もし相手の作戦や勝敗が常に予想できるのであれば成立しない。つまり、科学になりえないことこそがゲームの成立条件だといえる。

エ　医療の現場ではしばしば、限られた時間内で治療方法を決断しなければならない。その際には、一般的に有効とされている治療方法より、熟練や直観によって得られた治療方法の方がかえって功を奏することがある。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　中井久夫＝なかい　ひさお（一九三四～）奈良県生まれ。京都大学医学部卒。著名な精神科医で本書は多くの大学入試で出題されている

●西周＝にし　あまね（一八二九～一八九七）石見（いわみ）（現在の島根県）生まれ。福沢諭吉（ふくざわゆきち）や森有礼（もりありのり）らと結成した明六社（めいろくしゃ）のメンバー。多くの翻訳語・学術語の創出に貢献した

語句

疾患＝しっかん→心身のある部分の不具合。病気

提唱＝ていしょう→先だってある意見のよさを表明すること

褥瘡＝じょくそう→床ずれのこと

対象化＝たいしょうか→研究や分析の向かう相手をモノとし固定化すること

殺伐＝さつばつ→穏やかではないこと

表裏一体＝ひょうりいったい→表面上は異なるように見えるものが根底で一致していること

主体＝しゅたい→思考や行動を起こす者。人間

復権＝ふっけん→かつての勢力や高い地位を取り戻すこと

概念＝がいねん→思考や思想、またそれを表現する抽象的な言葉のこと

実体化＝じったいか→具体的形のないものに形を与えること

疫学＝えきがく→集団の統計的調査分析をする医学の一分野
実存＝じつぞん→「人間」と共通にくることのできない、個々に特別な人のあり方。現実存在
混沌＝こんとん→整理された秩序（コスモス）以前のどろどろの状態。カオス
未分化＝みぶんか→分析分割以前ということ
系＝けい→様々なものが統一的にまとまっているシステム。体系
力動的＝りきどうてき→固定化できないダイナミックな様子
創傷＝そうしょう→身体の傷
腫瘍＝しゅよう→身体にできる異常な細胞の集まり。癌（がん）など
定石＝じょうせき→基本に忠実で安定して有効な方法
捨て石＝すていし→作戦上、無駄に打ったもの。犠牲。「捨て駒（ごま）」とも表現する
直観＝ちょっかん→一度に全体を把握すること。インテュイション
　同音異義語…直感→ひらめき・勘・インスピレーション
専売＝せんばい→独占的に取り扱うこと
大局観＝たいきょくかん→全体を見通すものの見方
ヒエラルキー→ピラミッド型の階層構造、序列の構造。位階
戦略＝せんりゃく→長期的で大きな方向性を考えること
戦術＝せんじゅつ→局所的部分的な対処法を考えること
成案＝せいあん→完結完成した意見や提案　対義語…試案・草案

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）斬新な学説を提ショウする　①証　②賞　③章　④唱　⑤照

（イ）サツ伐とした話をする　①利　②殺　③撮　④擦　⑤薩

（ウ）困難や不都合を克フクする　①副　②覆　③服　④福　⑤複

（エ）航空機を自在に操ジュウする　①従　②銃　③柔　④縦　⑤揉

（オ）タイ局観をもって対処する　①大　②対　③体　④耐　⑤態

（カ）人間を対ショウ化できない　①照　②称　③賞　④象　⑤症

（キ）実験をサイ現して証明する　①再　②際　③採　④裁　⑤済

（ク）構造を近ジ的に把握する　①字　②次　③治　④自　⑤似

（ケ）全体像を直カン的に捉える　①感　②勘　③観　④幹　⑤敢

（コ）特イ体質にも対応する　①偉　②威　③意　④医　⑤異

第四講〈論説〉文芸論・詩画集論

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

詩画集というものがある。二十世紀の美術家と詩人のあいだでは、多くの詩画集が作られているし、そのあるものはすばらしいものである。日本でも最近は少なからぬ詩画集が制作されている。

九世紀後半、漢詩と絵が組み合わされて屏風(びょうぶ)芸術の第一期を作り、十世紀に入るとすぐのころからは和歌と絵の組み合わせに変わって大量に作られたようである。この絵と歌の総合体は、つまりあの当時の「詩画集」だったとはいえないだろうか。もちろん、屏風は、寝殿(しんでん)造りという仕切りの少ない家屋構造にあって、必要欠くべからざる家具であったわけだが、同時にそれが装飾品として、絵画における*唐絵から大和絵への移行、詩歌における漢詩から和歌への移行という、九世紀・十世紀の交に生じた日本芸術史上の一大転機に極めて深くかかわったとき、それはまさしく、詩画集という独立した芸術作品としての位置と意味をも持つにいたったといっていいだろう。

私がこれらの屏風の消滅を残念に思う理由のひとつは、それが美術品として見た場合にも、詩歌史上の産物として見た場合にも、「世俗性」という点において、他のどんな美術品、詩歌作品にも劣らぬ意味と価値を持っていたはずだと思うからである。私たちが今見ることのできる奈良朝、平安朝の美術の遺品は、絵画に関していえば、宗教画か、しからずんば絵巻に限られるといっていい。高僧や貴族・武家の肖像画も平安末期になれば現れるが、平安中期までのものに関しては、宗教画と絵巻物ばかりといってよい。それらは国宝とか重文の指定を受けて私たちにもよく知られている。そのため、古い時代の絵といえばこの種のものに限られていたという早とちりさえしかねないのである。

けれども、事実はそうではなかった。皇族や貴族の宮殿・邸宅では、寺院における仏画にまさるとも劣らぬ数の、風俗を主題とした絵が飾られ、鑑賞されていたのである。ここでいう風俗画とは、春夏秋冬の風物と行事を描く月次絵(つきなみえ)、家の内部でくりひろげられる男女の交渉を中心とした屋内風俗の絵、あるいはまた名所・歌枕など旅情を誘う土地の絵、唐絵の影響をたくみに消化した大和絵の日本的山水画や脱俗隠士(いんし)の閑居姿を描いた絵、また農耕漁労(ぎょろう)を中心とした庶民生活の描写その他、広範囲にわた

る主題をひとつにくくる言葉として用いたのだが、つまりは［A］が、屏風絵の主題であったといっていいだろう。『古今集』撰進の勅が下った延喜五年以後のいちじるしい現象として、紀貫之をはじめとする当時の歌人たちの家集に*屏風歌が激増するのは注目すべきことだが、それらの歌の詞書ならびに画題を眺めてみるだけでも、世俗的主題の広がりについておよその概念はつかめる。そしてそれは、ある種の魅力的な空想を私たちに許すのである。

それにしても、なぜこれらの屏風は現存しないのか。当然のことながら、それらはその用途において最も損耗しやすいものだった上、たとえば寺院の仏画が最も聖なるものとして秘蔵されたような具合には、所蔵者によって秘蔵されることがなかったから、早いうちに消滅してしまったのである。天皇、上皇などの場合は一応別だが、これらの所有者の貴族たちは、古代から中世への転換の時期に、多くは没落していった。戦火や自然の災害によって、彼らの邸宅は灰となり、あるいは朽ちはてたが、屏風はたとえば絵巻とはちがって、手軽に持ち運び安全な場所へ移すということもできなかったから、家と一緒に消滅するほかなかった。さらにまた、武家の時代になれば、世俗画の主題にも、大きな嗜好の変化が生じるのは当然で、王朝的主題は、ある種のノスタルジーを一時はかきたてたかもしれないが、まもなく中世のダイナミックで荒々しい動きをもった主題に取って替わられたにちがいない。万一、幸運にも戦火をくぐって生きのびた屏風があったとしても、それらは武家や商人の屋敷の片隅で、冷淡な好奇のまなざしに時々は見つめられながら、静かに埋もれて朽ちていっただろう。材質もまた、絹でなく紙であっただろうから、歳月をしぶとく耐えぬくのには適していなかった。紙を用いてあっても絵巻の場合なら、保存の条件に格段の相違があり、そのために私たちは今日、屏風絵よりもやや時代が下るものにはちがいないが、ともかくも「源氏物語絵巻」「信貴山縁起」「伴大納言絵詞」以下の絵巻を見ることができるのだし、屏風絵全盛期よりほぼ二世紀さかのぼった時代の「絵因果経」もその一部が現存しているのである。

こういうわけで、私たちは紀貫之らの歌人がみずからの歌を色紙形に書いて、当代一流の画工とともに共同の作品に仕立てあげた詩画集を見る機会を失ったのである。

私はときどきこのことを考えては、惜しいと思う。以前、南蛮屏風について小文をものしたことがあるが、そのときにも、屏風というものがその用途の性質上、きわめて破損しやすいものであることを痛感した。保存状態の良好なものももちろんあったが、子供がいたずらして傷つけたと思われるような汚れも含めて、日常生活の実用品であるために避けられなかった破損を目に

するたびに、屏風というものの［B］を見る思いがした。

『伊勢集』（いせ）には、伊勢がその後宮（こうきゅう）で暮らしていた宇多天皇の宮廷で、長恨歌（ちょうごんか）の屏風絵が行われていたことが書かれている。また*『菅家文草』（かんけぶんそう）巻二の仁和（にんな）元年（八八五）のくだりには、右近衛中将（うこんえのちゅうじょう）平正範（たいらのまさのり）が太政大臣藤原基経（ふじわらもとつね）の五十の賀のため屏風絵を調進することになり、その屏風絵に題すべき詩を菅原道真（すがわらのみちざね）に依嘱（いしょく）したこと、道真がこれに応じて五篇の詩を作ったことがしるされている。五篇の詩の、題だけあげれば、「郊外に馬を翫（なら）ふ」「道士が恒春の酒を勧むるを謝す」「居を卜（し）む」「南園に小楽を試む」「園池の晩の眺め」。詩の中には、中国の神仙（しんせん）思想や隠士閑居の風流に憧れる気持ちが強く流れている。しかし、その絵は、はたしてどんな図柄だったのだろうか。まったくの唐絵のスタイルだっただろうか、それともすでに大和絵のスタイルが潜在的には芽生えていただろうか。

道真には、『菅家文草』巻五、寛平（かんぴょう）四年（八九二）のくだりにも、「田家閑適（かんてき）」および「漁父詞」という二篇の屏風絵に題した詩がある。後者はわけても愛唱するに足る七言絶句だと思うので、引いておきたい。

抱膝舟中酔濁醪　　膝を抱き舟の中にして、濁醪（にごりさけ）に酔ふ
此時心与白雲高　　此の時、心は白き雲とともに高し
潮平月落帰何処　　潮平（たひら）に月落ちて、何れの処にか帰らむ
満眼魚蝦満地蒿　　満眼の魚蝦（ぎょか）、満地の蒿（よもぎ）

この寛平期の詩になると、情緒はよほど日本的になっているようにも感じられる。寛平元年の頃には例の「寛平御時后宮（かんぴょうのおんときのきさいのみや）歌合（うたあわせ）」が催され、寛平六年にはほかならぬ道真が大使に任命された遣唐使一行の唐への派遣が停止され、以後沙汰（さた）やみになるという大きな転機があった。いずれも、宇多（うだ）朝において顕著になった唐からの日本の相対的独立という傾向を象徴的に示す出来事だった。道真はそういう転換期の重要な証人だったので、それゆえにたとえば右の「漁父詞」のような詩が、どんな絵と組み合わされて鑑賞されていたか、それを見ることができたらどれほど興味深いことかと思われるのである。

道真よりもほぼ三十歳ほど若かった新世代の詩人、それが紀貫之である。彼が宇多朝を代表する漢詩人なら、これは次の醍醐（だいご）

朝を代表するやまとことばの詩人だった。そして、当代の代表詩人たるからには、当然、屏風歌の名手でなければならなかったし、貫之はそれのまさに花実（はなみ）兼ねそなえた第一人者にほかならなかった。

『貫之集』には八百六十四首の歌が見えるが、そのうち実に五百三十九首が屏風歌である。これほどの高い比率で屏風歌すなわち他からの注文の歌を作っていた歌人は、もちろん他にあるわけもない。

このことは、私が右に述べてきたことの筋道に沿っていえば、貫之は美術における風俗画あるいは世俗画というジャンルに［C］ということを意味するだろう。

ところで美術におけるこの領域を詩歌の領域に移してみると、どういうことがいえるのか。

圧倒的に多いのは、一月から十二月までの月次絵（つきなみえ）に合わせるための季節行事の歌であり、春夏秋冬の歌である。そしてそれに彩りを添える形で、都の内外の屋内・屋外における男女の語らいや行楽、そしてもちろん恋の歌が、少なからず作られた。

このことは、貫之の屏風歌が、いやおうなしに京都周辺の日本の風土、その季節の移りゆきを、こまかに観察しては体系化してゆく作業をともなっていたということを意味するだろう。彼は一月、二月、三月と分かたれたそれぞれの季節に、何らかの詩的注釈をほどこすという作業を行ったわけで、それは必然的に、彼の名声を慕う同時代や後代の人々に、一種の規範として受けつがれてゆくことにもなった。

つまり、この当時の風俗画あるいは世俗画の中核をなしていたのは、実は季節感のいやが上にもこまやかな強調という主題だったということである。少なくとも、現存する歌のほうから眺めるなら、このことは疑いようのない事実であった。それゆえにこそ、私は、もし絵のほうも残っていたら、突き合わせてどんなに面白い比較ができたことか、と思うのである。

『貫之集』の屏風歌はおおよそのところ制作年代順に並べられていて、洩（も）れなく彼の後半生を覆っている。したがってその歌風にも変化が見られるが、ここではふれない。歌をいちいち引いてみることも紙数の関係でできないので、目を惹（ひ）く詞書を拾ってみよう。

「延喜（えんぎ）六年、月次の屏風八帖が料の歌、四十五首、宣旨にてこれを奉る、二十首」とある屏風歌の場合――子（ね）の日遊ぶ家・二月初午に稲荷詣（いなりもう）でしたるところ・弓の結（けち）・三月田かへすところ・忘れ草・三月晦（つごもり）・五月照射（ともし）・六月鵜河（うかわ）・六月祓（はらへ）・七

月七日・織女（たなばた）・八月駒迎（こまむか）へ・小鷹狩（しょうたかが）り・衣うつ・志賀の山越え・十一月神楽（かぐら）・大鷹狩（おおたかが）り・臨時の祭り・十二月仏名。

こうして眺めれば、これらが後世の「歳時記」の季題にいかにまっすぐつながってゆくか、一目瞭然であろう。

「承平（じょうへい）五年十二月、内裏（だいり）の御屏風の歌、仰せによりて奉（たてまつ）る」の場合――

女、簾（す）のもとにゐたるに、男ものいふ。桜の花咲けり

子の日して、車のわかるるところに馬に乗れる人、松を車に送る

女、簀の子にさし入りたる桜の花折りたる。馬に乗りて道ゆく法師、垣越しにうちよりて見る

馬に乗りたる男ども、故郷（ふるさと）と思しきところにうちよりて桜を折る」（以下省略）

これらの詞書は、また別種の興味をひく。詞書からかなり詳しい［D］が想像されるからである。場合によっては、詞書の簡潔な叙述の方が、貫之の手慣れた歌よりもずっと面白く感じられることもある。

もうひとつ、貫之最晩年の屏風歌を引いてみる。これは歌も共に。

「同じ天慶（てんぎょう）四年正月、右大将殿［藤原実頼（ふじわらさねより）］の御屏風の歌、十二首」とある。

　元日、人の家に客人（まれうど）あまた来たり、あるは家のうちにいり、あるは庭に降り立ちて、梅の花を折る

春立たば咲かばと思ひし梅の花めづらしびにや人の折るらむ

　人の家に客人あまた来て、柳・桜のもとに群れゐて遊びするに、花散りまがふ

青柳（あおやぎ）の色はかはらで桜花散るもとにこそ雪は降りけれ

　　藤の花松にかかれる

昔いかに頼めたればか藤浪の松にしもなほかかりそめけむ

　男、神の社に詣でたる

祈り来る神ぞ思へばたまほこの道の遠さも知られざりけり

男女の木のもとに群れゐたるところに、舟に乗りて渡る人あるが、指をさしてもの云へるやうなり。そのさま時鳥を聞けるに似たり。

かのかたにはや漕(こ)ぎよせよ時鳥道に鳴きつと人に語らむ

海のほとりなる人の家に、女、簾を上げて海を見出だせり。そのなかにいたく老いたる女あり。

浜辺にて年経る人は白波のともに白くぞ見えわたりける

人々秋の野に遊ぶ

秋の野と萩の錦は女郎花(をみなへし)たちまじりつつ織れるなりけり

女はなの池のほとりなる対に群れゐて水の底を見る

月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひまどはむ（以下略）

歌には何とも出来のよくないものもある。画題の範囲が限られていたから、貫之のようにしばしば依頼を受けた場合、歌に新趣向を盛るのはこれでなかなか難しいことがあったろう。それでも、右の一連には別種の興味があって、それは、これらの歌には『土佐日記』の歌と格調の共通した歌が多いということである。『土佐日記』の執筆時期はこの屏風歌より数年前と考えられるが、貫之のこれらの歌の調べが、『土佐日記』所載の歌に通ずるものを持っているということは、何やら興味ある問題をはらんでいるようにも思われる。実際、「月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひまどはむ」という歌のごとき、ただちに『土佐日記』中の秀作、「影見れば波の底なる久方の空漕ぎわたるわれぞわびしき」を思い出させるのである。

それにしても、こうして見てくると、貫之の歌にも、またその詞書から想像される絵の内容にも、もはや唐風のところはまったくないといっていい。道真の時代からわずか半世紀ほどの間に、とにかくまことに大きな変化が貴族階級の美意識に生じたということが、これでわかるのだ。『古今集』というものの出現の意味も、こういう背景を考えあわせることによって一層鮮烈に実感されるだろう。貫之時代の屏風絵は、まさしく、京都という盆地の、山もあれば川もある穏やかな自然、またそこにめぐり来てはめぐり去る四季のこまやかな変化に対して、ひたすら寄り添っていこうとした当時の貴族階級の、現世肯定の世界観を、

こよなくみごとに示すものであったはずである。それこそ、屏風絵の主題がすなわち風俗画であり世俗画であった理由でもある。私はそれらの消滅を惜しんだが、しかしそれらは、本質的に、時代とともに消え去るべき運命のものであったともいえる。だからこそ、それらを思い描くとき、私の中には、儚（はかな）いけれども親しみ深く、またいとおしい幻の絵図が、何枚も浮かんでは消え、消えては浮かぶのである。

（大岡信『幻の世俗画』「鑑賞日本古典文学」角川書店、１９７５年による）

（注）

＊唐絵から大和絵への移行――唐絵は中国風の風景、描法で描かれた絵。大和絵は日本風の風景、描法で描かれた絵のこと。前者には漢詩を添え、後者には和歌を添えるのが一般的。

＊屏風歌――屏風絵に貼り付けるために詠まれた歌。屏風は絵と歌とが一体のものとして鑑賞される。

＊『菅家文草』――菅原道真の詩文集。

問１　文章中の空欄 A に入る最適な語句を、次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア　貴族と庶民の生活を対比させたもの

イ　自然を多面的に描写したもの

ウ　世俗の生活一切をひっくるめたもの

エ　非現実的な空想に満ちたもの

オ　ひとつの場面として独立したもの

問2　文章中の空欄［B］に入る最適な語句を、次のア～オから選び、記号で答えよ。
ア　価　値　　イ　宿　命　　ウ　主　題　　エ　情　緒　　オ　背　景

問3　文章中の空欄［C］に入る最適な語句を、次のア～オから選び、記号で答えよ。
ア　飽き飽きしていたはずだ　　イ　背を向けていたはずだ
ウ　強い関心を持っていたはずだ　　エ　深く通じていたはずだ
オ　自ら手を染めていたはずだ

問4　文章中の空欄［D］に入る最適な語句を、次のア～オから選び、記号で答えよ。
ア　歌の内容　　イ　絵の図柄　　ウ　作者の年齢　　エ　制作の事情　　オ　物語の筋

問5　傍線部「まことに大きな変化」とあるが、それは何風から何風への変化か。「［　］風から［　］風への変化」という形で答えよ。

問6　次のア～オから本文の内容に合致するものを一つ選び、記号で答えよ。
ア　屏風絵と屏風歌とは、基本的に同一の人間によって制作されることが多い。
イ　屏風絵に添えられた屏風歌には、意欲の乏しい、つまらない内容のものが多い。
ウ　平安時代の絵画には、屏風絵のような世俗画・風俗画しか存在しない。
エ　大和絵の画題には季節を主題としたものが多いが、漢詩の画題には季節感が乏しい。
オ　屏風絵は絵巻のように持ち運ぶことができないため、消滅しやすい。

第四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　大岡信＝おおおか　まこと（一九三一〜二〇一七）静岡県生まれ。東京大学文学部国文学科卒。詩人としての作家活動の他、明治大学教授、東京藝術大学教授など歴任。朝日新聞朝刊の連載「折々のうた」でも知られる

●紀貫之＝きの　つらゆき　『土佐日記』の書き出し「男もすなる日記というものを女もしてみんとて」

○「歳時記」年中行事とそれにまつわる生活を記した本。俳句の季語を収録した本も歳時記という

語句

転機＝てんき→変わり目。ターニングポイント

世俗性＝せぞくせい→宗教性とは対比的な日常性

早とちり＝はやとちり→数例見ただけで間違った判断をしてしまうこと。早合点（はやがてん）。早飲み込み

風俗＝ふうぞく→日常的な暮らしぶり

歌枕＝うたまくら→和歌に詠まれた名所やそれを記した書物

旅情＝りょじょう→旅をしているんだというしみじみとした実感

隠士＝いんし→世間から離れ山などでひっそり暮らす人。隠者（いんじゃ）

閑居＝かんきょ→のんびりとした暮らしの場。または暇（ひま）であること

勅＝ちょく→天皇のことば。勅命

詞書＝ことばがき→和歌などの前書き説明

概念＝がいねん→考えや思想、およびそれを表現する抽象言葉
損耗＝そんもう→使っているうちに擦り減ったり傷んだりすること
嗜好＝しこう→趣味上の好み
ノスタルジー→失われたものを懐かしむこと。懐古趣味
好奇＝こうき→珍しいものに興味を向けること
小文をものす＝しょうぶんをものす→ちょっとした文章を書くということ。小文とは、自分の書いたものを控えめに、謙遜して表現したもの
後宮＝こうきゅう→天皇の后などが住む宮殿
長恨歌＝ちょうごんか→中国の詩人白居易（はくきょい）（七七二〜八四六）の作品。唐の玄宗（げんそう）皇帝と美女楊貴妃（ようきひ）を題材にした感傷的な詩。「ちょうこんか」とも読む
調進＝ちょうしん→注文に応じてつくり贈呈すること
依嘱（委嘱）＝いしょく→特定の仕事を外部に依頼すること
神仙思想＝しんせんしそう→山中での修行により不老不死や神通力（じんつうりき）を得た仙人がいるという考え
道士＝どうし→道教を極めた人。仙人
居を卜む＝きょをしむ→占いで住んでもよい土地か決めること
沙汰やみ＝さたやみ→問題や話題とされなくなること、あるいは、物事の評価や判断をしないこと
花実兼ね備えた＝はなみかねそなえた→名実、つまり名声と内実や才能をともに兼ね備えていること
体系化＝たいけいか→一つの方針にもとづいてまとめ上げること
格調＝かくちょう→芸術作品などがもつ味わい

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）世ゾク性を題材とした作品　①属　②続　③俗　④族　⑤賊
（イ）平安朝の屛風絵をカン賞する　①鑑　②干　③感　④環　⑤完
（ウ）山中のカン居で静かに暮らす　①閑　②官　③間　④監　⑤館
（エ）古寺の秘ゾウ品を調べる　①臓　②像　③造　④蔵　⑤贈
（オ）芸術史上の一大転キとなる　①機　②気　③期　④記　⑤貴
（カ）屛風の用トを考える　①戸　②途　③徒　④吐　⑤都
（キ）冷タンなまなざしを受ける　①鍛　②担　③胆　④淡　⑤丹
（ク）中国の神セン思想を表現する　①線　②仙　③鮮　④選　⑤戦
（ケ）研究を体ケイ化してまとめる　①景　②敬　③系　④形　⑤計
（コ）格チョウの高さを受け継ぐ　①帖　②調　③張　④庁　⑤徴

模範解答

第一講　模範解答

問1　4
問2　5
問3　5
問4　イ　1　ロ　2　ハ　2　ニ　2　ホ　1
問5　3
問6　イ　2　ロ　1　ハ　2　ニ　2　ホ　1

第二講　模範解答

問1　オ
問2　エ
問3　A　キ　B　ア　C　カ　D　ウ
問4　ウ
問5　イ
問6　「読み」の行為なのだ

第三講　模範解答

問1　E

問2　D

問3　C

問4　(4) A　(5) C　(6) B

問5　ア B　イ A　ウ B　エ A

第四講　模範解答

問1　ウ

問2　イ

問3　エ

問4　イ

問5　漢詩（風から）やまとことば（風への変化）

問6　オ

復習問題解答

復習問題　第一講　模範解答

（ア）②　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）①
（カ）⑤　（キ）④　（ク）③　（ケ）①　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）移入　（イ）漫画　（ウ）忠実　（エ）愚直　（オ）孤独
（カ）犠牲　（キ）渦中　（ク）機構　（ケ）官僚　（コ）急進的

復習問題　第二講　模範解答

（ア）③　（イ）①　（ウ）①　（エ）④　（オ）①
（カ）②　（キ）④　（ク）③　（ケ）③　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）不可解　（イ）至上　（ウ）歓迎　（エ）緩和　（オ）美容
（カ）創刊　（キ）指南　（ク）定番　（ケ）賛辞　（コ）常套句

復習問題　第三講　模範解答

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）①
（カ）④　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）提唱　（イ）殺伐　（ウ）克服　（エ）操縦　（オ）大局観
（カ）対象化　（キ）再現　（ク）近似　（ケ）直観　（コ）特異

復習問題　第四講　模範解答

（ア）③　（イ）①　（ウ）①　（エ）④　（オ）①
（カ）②　（キ）④　（ク）②　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）世俗性　（イ）鑑賞　（ウ）閑居　（エ）秘蔵　（オ）転機
（カ）用途　（キ）冷淡　（ク）神仙　（ケ）体系化　（コ）格調

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。